



西海区水産研究所 ニュース

ISSN 0915 - 5775

No .98(1999年 夏季号)
水産庁西海区水産研究所
〒850-0951 長崎市国分町49番地
TEL(095)822 - 8158
FAX(095)821 - 4494
URL <http://www.snf.affrc.go.jp>



センウマツラハギ *Cantherhines mutilineatus* (Tanaka)

D -32 ~ 33; A 32; P1 13; C 12.SNFR 1679,1689

本標本には腹鰭がなく、腰骨後端に1棘を有する。第2背鰭、臀鰭及び胸鰭の鰭条は不分枝である。鱗は小さくて、微小な棘を具える。背鰭棘は2本で、第1棘が眼の後縁より前方にあるなどからカワハギ科 Monacanthidae に属する。また、腰骨後端の鞘状鱗の関節部は非可動で、先端が肛門下近くに達する。背鰭第1棘起部は瞳孔前縁上にあり、その後側部に並ぶ小棘が前面のそれより大きいなどの特徴からセンウマツラハギ属に含まれる。

日本近海産の本属魚類はハクセイハギ *C. dumerilii*、アミメウマツラハギ *C. pardalis*、メガネウマツラハギ *C. fronticinctus* 及びセンウマツラハギ *C. mutilineatus* の4種が知られている(松浦, 1988; 林, 1993)。このうち、東シナ海産本標本は、背鰭軟条数が32~33本で、体側に多数の暗色縦帯があることでセンウマツラハギと査定された。しかし、近年日本から出版されている図鑑による本種の形態記載と本標本のそれとは一致しない点もみられる。すなわち、日本産魚類検索(林, 1993)によると本種の尾鰭は短く、後縁が截形(図では2重湾入形)で模様もないとされている。また、体側上部には幅広く長い2本の縦帯が描かれてい

ない。一方、本標本の尾鰭後縁は円く、2本の横帯が見られるほか、体側上部にも幅広い2本の暗色縦帯が存在するなどの違いが認められた。さらに、東シナ海産本標本の体側上部に明瞭に見られる2縦帯や尾鰭の2横帯がインド洋産センウマツラハギでは(久新ほか, 1988)極めて不明瞭である。また、前者の肛門周辺部は暗褐色を呈するが、後者ではこれを欠くだけでなく、東シナ海産本種の胸鰭条数は13本であるが、インド洋産本種では19本と記載されている。

以上のことから林(1993)及び久新ほか(1988)と著者が今回記載したセンウマツラハギについて標本に基づく雌雄差、成長差、地理的変異及び種の異同を含めた精査が必要と考えられる。ちなみに、センウマツラハギは1918年に田中茂徳博士により新種記載されたものであるが、これと本標本は体節的・非体節的の形質ともに全てがよく一致した。

今回の標本は1999年7~8月に海洋水産資源開発センターが東シナ海陸棚縁辺部(27°46'N, 126°35'E; 水深150m)で実施した底びき網調査で得られたものである。

(解説 山田梅芳・堀川博史, 越智洋介・堀田俊孝(海洋水産資源開発センター); 写真 田川 勝)



目次

表紙	センウマツラハギ <i>Cantherhines mutilineatus</i> (Tanaka) ...1
巻頭言	科学技術に関する行政監察を受けて2
研究室紹介	石垣支所 沿岸資源研究室3
研究情報	
人工衛星から見た東シナ海の植物プランクトン分布5
クロマグロ産卵群の漁獲状況11
陽光丸による海獣・海鳥の目視調査13
研究調整16
情報発信・交流	
「海の懇話会」について17

研修・指導	
マダガスカルでのクルマエビ類の防疫・細菌検査指導19
西海ブロック水産研究及び水産業情報21
所内談話会24
業績一覧24
西海水研日誌26
編集後記28